

優秀賞

地元の暖かさ

富山県 高岡高等学校二年 芳賀 茜

「なかなか人がいなくてねえ。芳賀さんに出てもらえたら嬉しいのだけれど。」

ある日の朝、そう言って私の家に来られたのは町内会長さんだった。今度、私の住む埴生地区の体育祭があり、町内のリレーメンバーに高校生が必要なのだという。いくつか家をまわられたそうだが、出られるという人がいなかったらしい。

「芳賀さんは前陸上部だったんでしょ。足速いだろうってみんなから推薦があつてね。」

私は中学校のとき陸上部だったが、高校に入ってからもう部に入っていないので、しばらくまともに走っていない。それに私は長距離が専門だったので、短距離にはそれほど自信がない。そして何より、やるべき宿題も残っている。正直、面倒くさい。断りたかった。しかし、町内会長さんがわざわざ私の家に向いてこられて、私にぜひ出てほしいと懸命に頼んでおられるのだ。特に用事があるわけでもなかったし、しぶしぶ私は承諾した。

そして迎えた体育祭当日。母と共に埴生コミュニティグラウンドに向かった。グラウンドには各町内のテントが張られ、小さい子どもとお母さんや地域に住むお年寄り、焼きソバなどを売る仕事をしている中学生もいた。私のような高校生はあまりいないようだった。ちょっと走ればすぐ帰れるだろうと思っていた。

「芳賀さんですか。」

綾子(私の住む町の名)のテントの前で、町内の世話をしているらしい男の人に話しかけられた。

「リレーは十二時五十分からです。これは予選で、二時二十分から決勝があります。綾子はたぶん出られると思うので、頑張ってくださいね。」

そういえば決勝があるということも忘れていた。私は中学生のときもこのリレーに出ていたので知っている。綾子はたいてい強くて、決勝に残るのだ。

リレーは年齢が低い順に走るようになっていく。最初は小学校低学年の子で、アンカーは四十代の人だ。私の前を走るのは中学生たちだったが、見覚えのある顔だった。私が小学校高学年のときに、集団登校で同じ班だった子だ。その子たちも私の顔を覚えているようで、まわりの友達とソソコソと話をしているようだった。昔はよく近づいてきてくれたのだが、今はなんとなく話かけにくかったらしい。私も結局話しかけることができなかったが、今思うとちょっと話せたらよかったなと後悔している。

私の後を走る女の人たちは、同じ町内に住んでいるのに知らない人ばかりだったが「頑張ろうね」と声をかけてくれて嬉しかった。優しい人たちばかりだった。

ついにリレーが始まった。走る間はあっという間だった。私の力なんてわずかでしかないが、綾子は一位だった。見事、予選通過だ。

テントに戻ると、いろいろな人に声をかけられた。「頑張ったね。」「芳賀さん、速かったよ。」私の知らない人なのに、どうして私の名前を知っているのだろうか。中学生のときに、市の駅伝大会に埴生チームで出ていたことで知られたのかもしれない。よく分からないけれど、嬉しくて、暖かい気持ちになった。

そして決勝の時間になった。決勝では、やはり選ばれたチームだけであってレベルが高く、バトンをもらったときの順位をキープするので精一杯だった。私のときは二位だったが、後半

の人の頑張りで、見事一位でゴールした。

「良かったね。」

とみんなで言いあった。

嬉しかった。来て良かったな、と思った。というのには、結果が良かったのはもちろんのこと、暖かい気持ちになれたからだ。

中学生のときは部活があったが、高校に入ってから部活もほとんどなく、勉強がメインだった。夏休みは家や塾で課題をこなすのがほとんどで、会う人も話す人も限られていた。この体育祭に参加して、知らなかった人と接することで、自分の世界が少し広がったような気がした。私のことを知り、応援してくれる人がたくさんいたということに、心を動かされた。

「地球」は温かいと思う。こんなに近くに、いい人がたくさんいるということ、忘れかけていたような気がする。

私は最近、進学する大学についてよく考える。今まで、なんとなく都会へのあこがれが強かった。都会に行けば、より高度な知識や技術を得られるだろう。楽しい場所もたくさんある。その一方で、地元に残り、今までお世話になった人たちや地域のために働くのもいいことだと思った。遠くへ行くことになっても、地域を大切にすることは忘れないようにしたい。そしていつか何らかの形で地元に貢献できたらと思う。